

令和6年度グランドデザインの解説

グランドデザインとは、本年度本校が何を目指し、どういう手段と体制で進もうとしているかを、構造的に理解していただくためのものです。より詳しい内容については、学校経営計画でお示しし、学校評価も、その内容で頂ければと思います。

1 全体像

グランドデザインは、おおよそ3つの構造に分かれます。上段は目標やスローガンなど本校が進もうとしている方向性を、中段は、その実現のための主な手段を、そして下段は、組織を示しました。

まず本年度のスローガンは「つなげよう」としました。

2年前のスローガン「開く」から、昨年度は「深ぼろう」、そして本年度は「つなげよう」です。その想いは後で説明しますが、普遍的な位置づけである目指す学校の姿の実現を担うひと、もの、こと全てを象徴する合言葉となります。

実現のための手段は、もりこのプロジェクトとコミュニティスクールの2つです。これらは相互に関連づくものであり、各種取り組みをとおして相乗効果をねらいます。

組織は、いわゆる専業縦割りの弊害をなくし、小さな目標に皆が協働的・効率的に向かえるよう、経営の4重点に対応した組織になっています。

2 目標とスローガン

まず本年度のスローガン「つなげよう」について説明します。

2年前「開く」というスローガンで閉塞感からの脱却をはかりました。昨年の「深ぼう」では、子どもの有意義な学びのために何が必要か、何をすべきか、教職員や関係者一人一人が、常に本質(そもそも論)にたちながら考え抜き、実績をゼロベースで積み上げました。その上で、本年度は各主体がおのこの深めてきた取り組みの成果の相乗効果を狙う年にしたいと思います。

具体的には、3つのつながりを想定しています。地域の人たちや自然資源という地域の財とつながり、体験と教科学習を効果的に関連付けた、学びやすい・わかりやすい授業づくりにつなげ、それがひいては子どもたちの未来の姿、自立と社会参加へつながる、このような想いを「つなげよう」に込めています。

副題は、その要となる「ワクワクとモヤモヤの好循環」を昨年度から継続します。ワクワクは重要です。しかし、前に進めば向かい風が吹き、曲り角では迷い、時には引き返しやり直す営み、どうしよう・なぜだろうという一見遠回りを要するモヤモヤこそ重要で、良質で好循環な学びと個々の成長につながると考えています。

本年度も、沢山の場面で、教職員の創意工夫で、適度で確信をもった良好なモヤモヤを意図的に準備し、子どもたちが「解く」から「問う」学びを重視します。

目指す学校姿は、「持続可能で選ばれる地域共生型学校」として継続し、通学区である大子町、常陸大宮市の外部資源等と連携のもと、共生風土の実現を見据えて進んでいきます。

3 主な手段、方法

育てたい子ども像は、昨年度と同じ「得意をもち、柔軟で、粘り強い子」としました。これは、知識・技能、思考・判断・表現、学びに向かう力・人間性等という学習の3観点に対応しています。

昨年度は保護者等から学習成果の評価結果をいただきました。その結果をうけ、本年度は特に「粘り強さ」の育成に力点を置いた学習指導を意識し、様々な体験的な行事や連携事業、授業づくりを工夫していきます。

経営の重点としては、「学びがいい」「働きがいい」「頼りがいい」「生きがいい」の4つを継続します。これらは、子どもはもちろん・教員・保護者・地域の関係者すべてにあてはまる共有の価値です。子どものよりよい学びは、教師やサポーターの働きがいいにつながり、保護者の生きがいいになります。地域や関係諸機関から特別支援教育の中核として頼りがいのある学校は、共生社会の実現の基となります。これら4つを実現していくため、後に述べますが、組織面での工夫もしていきます。

そして主な手段は、「もりのこプロジェクト」と「コミュニティスクール」の2つです。これらは地域資源を活かした特色ある教育の実現のため、相互に関連づけて推進していきます。その重要なハブとなるのは地域資源です。ヒトやモノなどの地域財を生かした、体験的で实际的な学習機会と、国語・算数・社会・理科などの教科の学習を意識的に関連付けた授業づくりに取り組みます。この取り組みは、子どもが学びやすく、わかりやすい授業づくりを目指して、学校研究で取り組むとともに、本校の強みの一つであるICTを駆使した学習指導をさらに強化します。

4 組織づくり

先に経営の重点を4つ掲げました。教育または関連する実務を担う組織等については、進路指導・生徒指導・学校研究、など、従来の専門縦割りから、経営の4重点に応じた組織としました。立場を超えた集団が小さなゴールを共有し、協働・協業による成果を積み上げ、学校全体の目指す姿に近づいていく組織風土をつくります。

当然ですが、学校の教職員のほか、本校教育に理解を寄せ協力いただいている保護者をはじめ、もりのこサポーターの組織的な下支えは大変重要です。学校、教職員は万能ではありません。すでに学校は、多くの人材のもつ強みや経験、ネットワーク等の提供と協業は、目標の実現において必須となっています。さらにこの方々各自が、様々な場面で本校教育の広告塔となり、障がいのある子どもの地域における自立と社会参加につながる共生社会の土壌づくりに貢献してくれることを期待しています。

5 まとめ

持続可能で選ばれる地域共生型学校を目指して、子どもたちとともに日々ワクワクとモヤモヤの好循環を大切に、変化とかかわりを楽しみながら充実した特色ある教育を提供できるよう、教職員一同が「つなげよう」を合言葉にまい進していきます。本年度もぜひ、ご協力とご支援をお願いいたします。

茨城県立大子特別支援学校長 大澤宏規